

はじめに

私たち金沢大学附属小学校は、「であう・つながる・うまれるコミュニケーション」というテーマのもとに、今年で三年目となる研究を進めております。この紀要では、その実践と研究成果をご報告します。なにとぞご高覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いに存じます。

人間が他者の意見を理解し、それを自分の意見と比較して、自他の異なりを意識するという出来事は、日常生活の中でごくあたりまえに起こるものであり、それなしには人間の社会的生活は成り立ちません。しかし、そのメカニズムは考えてみればとても複雑で不思議です。どのようにして、自分でない他人の意見を頭の中で組み立て、それをさらに自分の意見と並べて比べるなどということが、可能になるのでしょうか。このような問題については、哲学や心理学の世界で古くから考察が行われてきました。また、最近の心理学は、情報科学の知見を取り入れながら、人間がさまざまなものごとを理解する認知の仕組みについての解明を進めてきており、他者理解や伝達についても新しい視野が開けつつあると思われまふ。それでもやはり、他者を理解する時、人間の頭の中で何が起こっているかは、深い謎であるという印象は否めません。

一方、教育の世界は言うまでもなく実践的世界であり、日々の現実との格闘です。何か学問的に解明されるのを、ただ待っているわけにはいきません。今年度、私たちは、児童が他の児童の考えを理解し、それを通して自らの考えを意識し、深めていく過程を、「受けとめ合いと見つめ直し」として捉えようと試みました。具体の授業の進行の中で、児童の姿の中にその過程を看取することに留意しながら、授業の狙いに沿って、どのようにその過程を確保するかを考えてきました。「受けとめ合いと見つめ直し」という捉え方の妥当性や可能性は、そのような捉え方をすることによって具体の授業の把握がどのくらい明確になるか、その把握が、授業の構想や、授業進行過程での授業者の対応の仕方に、どの程度有効に寄与するかによって、判断されることになるでしょう。

この紀要を御覧頂く皆様におかれては、私たちの狙いを共感的に受け止めて下さると共に、その至らぬ点については、同じ実践者としての立場から、あるいは教育実践に深い関心をもたれる研究者としての立場から、厳しいご指摘とご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、つねづね本校の研究に、直接・間接にご協力とご支援をいただいている皆様方に、厚く御礼申し上げます。

金沢大学附属小学校
校長 山本 一